

聖書: エステル記2章1～11節

説教: 一人のユダヤ人がいた

はじめに

これまでのことを簡単に振り返っておきます。今からおよそ二千五百年前、当時世界でもっとも大きかったペルシャ帝国の中心都市スサにあった宮殿で開かれたパーティーで、クセルクセス王は酒に酔った勢いで、妻の美しさを自慢したくなり、王妃ワシュティを呼ぼうとしたのですが、なぜか王妃はそれを断って出てこなかった。大勢の招待客の前で恥をかかされた王は、このことを国家の重大問題ととらえ、閣僚会議を開いて対応を話し合った結果、ワシュティは一生王の前に出られないことになり、今のことばで言えば左遷させられてしまいます。また法令を国中に出して、妻は夫を尊敬するように、ことばも文化も宗教も夫に従うようにと言って引き締めを図った。このときはどこにでもありそうな宮廷ゴシップのようにしか見えなかったものが、後から振り返ると、このことがあったがゆえにエステルが次の王妃となり、ユダヤ人大虐殺計画が発覚したとき、エステルの尽力によって阻止することができた。そのような道筋の備えとなっていたことが見えた。これが前回までのあらすじでした。

きょうは、そのエステルがどのようにして王妃に選ばれていったのか、エステルを育てたモルデカイはこれをどのように考えていたのか。そのことを見てまいります。

## 1 クセルクセス王

### 1) 新しい王妃を捜す

ワシュティ騒動がおさまり、落ち着きを取り戻した王は、あいたままになっている王妃の席をどうするか考えた結果、改めて国中から容姿の美しい未婚の娘を捜すことにします。後宮から選ぶこともできたはずなのに、どうしてわざわざこうするのかと言えば、ワシュティに匹敵するような美しい女性が後宮にいなかったからでしょう。それで国中におふれを出して娘たちを集め、美人コンテストをすることにしました。

### 2) 美人コンテスト

その美人コンテストですが、最近では男性の目で女性の美しさを競わせるのはけしからんというような意見も増えてきました。今日のところを読めば、神に用いられる女性とは美人でなければなら

ないのか。それは差別だ。そんな疑問も出てきそうです。もちろん、そんなことはない。もしもこの世界に女性差別があるとすると、それはひとえに人の罪が原因です。神もそのことはよくご存じです。その一方で、問題があるからこの世界はだめだと切り捨てる方でもない。問題はあるけれど、神は忍耐強く私たちの罪と関わり続け、ときには人間の弱ささえも用いて救いを与えようとされる。だからこそ私たちは絶望しなくてよい。いろいろな問題があっても、なお希望を見いだすことができる。そのように考えることができるのではないのでしょうか。

## 2 モルデカイ

### 1) ユダヤ人

5, 6節を読みます。「スサの城に一人のユダヤ人がいて、その名をモルデカイといった。この人はヤイルの子で、ヤイルはシムイの子、シムイはベニヤミン人キシユの子であった。このキシユは、ユダの王エコンヤと一緒に捕らえ移された捕囚の民とともに、エルサレムから捕らえ移された者であった。エコンヤはバビロンの王ネブカドネツアルが捕らえ移したのであった。」

ここでユダヤ人のモルデカイが登場します。ユダヤ人とあることから彼が信仰者であったことがわかるようになっていきます。曾祖父であるキシユがユダの王エコンヤと一緒に捕囚としてバビロン捕らえ移されたとあるあたりですが、調べてみるとこのことが起きたのは、ダニエルがバビロンに連れて行かれた八年後のことのようにです。そこから計算すると、エステル記はダニエルの時代からおおよそ百年たった時のことだとわかります。ですから、モルデカイは故郷を見たことがなくて、在ペルシャユダヤ人の四世ということになる。

### 2) エステルを育てる

そんな境遇にあつてモルデカイは、おじの娘を引き取って養女として育てます。「ハダサ」はユダヤ人の名前、花の名前だそうです。そしてバビロン人としての名前が「エステル」で、こちらは「星」という意味があるのだそうです。両親が亡くなった理由はわかりません。いずれにせよエステルは親を失い祖国も失い、親がつけてくれたユダヤ人としての名前も使うことができず、ただモルデカイを通

して聖書の神を信じる信仰を受け継いでいった。そのような女性だったと思われます。

### 3) 民族と生まれを明かさない

そのエステルが美人コンテストの出場選手に選ばれ、スサの城の後宮に行くとき、モルデカイはエステルに一つのアドバイスをします。10節。「エステルは自分の民族も、自分の生まれも明かさなかった。モルデカイが、明かしてはいけないと彼女に命じておいたからである。」

なぜだろうと考えます。バビロン帝国の王妃とるためには厳しい審査をパスしなければなりません。ユダヤ民族であると知れたら大きく減点されて、資格を失うかも知れない。それでこんなアドバイスした、ということでしょうか。当時バビロン帝国の中でユダヤ人が非常に不利な立場に置かれていたのなら、そのような可能性もある。しかし、この後に出てきますがモルデカイは、ユダヤ人であることを公にしながら、スサの城で公務員として働いていましたし、最後は王の右に座る大臣にまで取り立てられていきます。ということは、ペルシャ帝国ではユダヤ人だからと言って差別されるようなことはなかった。しかし、ではなにも問題がなかったかと言えばそうではない。そもそも、この後起こるユダヤ人大虐殺計画が企てられたのは、ハマンという人物のユダヤ民族に対する個人的なねたみや怒りが発端です。それは今の時代も同じです。法律の上では、生まれや民族で差別してはならないと書かれていても、人の心はそうはいかない。人の罪は、服装や肌の色、習慣の違いをことさらに問題にして差別しようと働くのです。

では、モルデカイがこのようなアドバイスをしたのは、後宮というところは誰が王さまから一番の愛情をもらえるか、そのような競争とねたみの渦巻く世界ですから、そこでつらい目に遭わないようにという配慮からだったのか。

## 3 神の備え

### 1) どうされるかを知ろうとした

もしエステル記が、一人の貧しい女性がある日突然王に見初められて王妃になる、まるでシンデレラ物語のようなファンタジーだというのであれば、エステルへの親心からこのようなアドバイスした、ということでは終わりです。しかし、これはユダヤ人の救いに関して書かれた聖書なのです。もっと別の動機があったのではないか。というのは11節にこうあるからです。「モルデカイは毎日、後宮の

庭の前を歩き来し、エステルの安否と、彼女がどうされるかを知ろうとしていた。」

モルデカイは先も言いましたとおり、スサの城を自由に出入りできる公務員でしたが、いかに親戚であろうとも後宮には入ることができない。それでも、いまどうなっているか心配で、なんとかエステルの声だけでも庭の先から聞こうとした。そういうことはあるでしょう。しかし次のことばはどうでしょうか。「彼女がどうされるかを知ろうとしていた。」

これは不思議な表現です。二つの解釈があります。一つは、「王が」エステルをどうするか、王妃にしてくれるのかそうでないのか、そのことを知ろうとした。しかし、モルデカイは信仰者だったのです。そしてエステル記は神の備えについて書かれた聖書であることを度々述べてきました。ただ王妃になれるかどうかではないのです。「神が」エステルをスサの城の中でどのようにされようとしているのか、そのことを知ろうとした。ここはそのように理解したほうがふさわしいと思います。モルデカイは、この出来事を神の視点で見ようとしていたのではないか

なぜ、ユダヤ民族であることを明かしてはならないと命じたのか、ここだけからははっきりわかりません。ただ、モルデカイが、この出来事を神のご計画が進められるための備えであると感じていたと言うことはできます。

### 2) 神の視点で見る

この神の視点で見ると言うことに関してです。それは具体的にどのような見方なのか。たとえば、この四月に高速道路を走っていて私の運転していた車が急停止するという事故が起きました。整備工場の方から、あの雨が降っていなかったら車が横転して大事故になっていたかも知れないと聞かされたとき、こう考えました。最悪のこのなかにも、神は最善の備えをしてくださっていたのではないか。

でも、違う考え方をする人もおります。それは、単なる偶然が重なっただけです。たまたま車を整備した人がミスをしただけで、たまたまあの日に雨が降り、たまたまそこで事故が起きただけ。神などいるはずがない。そもそも学校では神のことは習わなかった。これは一見理屈が通っている。でも、その考えを押し広げていったら、その先に何があるか。私がなぜ生きているのか、答えがないことになる。生きているのは偶然に過ぎない。私は偶然産まれて、偶然ここにいるだけ。生きている

ことに意味もない。泣こうが笑おうが、どうしようともすべては偶然なのです。そこに希望があるのか。ありません。神はいないという前提に立てば、結局すべての人は絶望するしかありません。

### 3) 苦しむ者を備える

しかし聖書は違うといます。神はおられて、今もなおこの世界に関わり続けている。モルデカイはそのことを信じて、補囚となっているユダヤ人の救いのためにずっと祈っていたはずです。そんなときに、なぜわざわざエステルが王妃に選ばれていくのか。もしかして祈りと関係があるのだろうか。もしそうであるなら、神はどのようにしてユダヤ人を救うのだろうか。いにしへの信仰者の歩みを思い浮かべてみたらどうか。たとえばダビデはどうだったか。イスラエルを敵から救い、神の国を建て上げた人だったけれど、そのために多くの苦しみを味わわなければならなかった。そう考えたら、エステルがお城に召されたことを単純に喜ぶことができないのです。もしかして、その先エステルは神のご計画のために苦しみの道を歩むのではないか。モルデカイは信仰者として、既にそのような予感があったのかもしれない。

私たちが王妃に選ばれることはまずないでしょう。しかし、救われてクリスチャンになったのは、自分の力ではない。神に選ばれたからとしかいいようがない。うれしいことではあるのですが、いっぽうではそれはもしかして、神のご計画のために苦しみを味わうことになるかもしれない。もちろん決して無駄な苦しみではない。ピリピ1章29節にこうあります。「あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。」

主ご自身が、私たちを救うために十字架で苦しんでくださったことを思い起こします。私たちの人生に関わってくださる主の御名をあがめます。